

＜青年期の吃音者が親に求めるソーシャル・サポートに関する研究 －社交不安障害との関連－研究テーマ＞

研究年度 令和 1 年度

研究期間 平成 31 年度～令和 1 年度

研究代表者名 吉田恵理子

共同研究者名 永峯卓哉、菊池良和

I. はじめに

吃音症とは、繰り返し、引き延ばし、ブロックの3主徴を特徴とし、滑らかに話すことが妨げられる言語障害である¹⁾。吃音者は、吃音によるコミュニケーション障害により社交不安障害（Social Anxiety Disorder：以下SAD）に陥りやすいことが報告されている^{2) 3)}。青年期は、進路の選択、友人関係の変化、自我同一性の確立など様々な課題があり、それがうまく達成できないと危機をもたらす。親との関係も適切な距離を保つことが大切である。吃音者の親は、子に「どこまで、どのように支援してよいのか」親役割や心理的距離についての悩みを抱く。しかし、青年期の吃音者自身が親にどのような支援を求めているかは明らかでない。なお、ここでいうソーシャル・サポートとは、HOUSE³⁾による4つのソーシャル・サポート（情緒的、評価的、情動的、手段的）とした。

そこで、本研究は、青年期の吃音者が親から受けている支援と社交不安障害の関係、親に望む支援について明らかにすることを目的とする。

II. 研究の参加者と方法

1. 研究参加者

機縁法により、吃音の症状を持ちながら生活している青年期の人に研究参加を依頼し、調査の同意が得られた人とした。

2. 研究方法

データ収集期間は、平成 31 年 1 月から 3 月、令和 1 年 8 月から 12 月であった。データ収集方法は、吃音者は、過緊張により吃音症状が強まる傾向にあるため、事前に吃音者が参加する、吃音に関連した会やインフォーマルな場に参加し、顔見知りになったうえで研究依頼を行った。調査内容は、LSAS-J リーボヴィッツ社交不安尺度（日本語版）を使用し社交不安を測定した。LSAS-J は 24 項目で構成され、さまざまな社会状況について、恐怖や不安の程度と回避の程度を 0～3 の 4 段階で採点し、その合計点で評価する。また、親の支援に関しては、研究者が独自に作成した質問紙を使用した。親のサポートは、現在母親から受けているサポート、実施の有無にかかわらず吃音者が母親に望むサポート、現在父親から受けているサポート、実施の有無にかかわらず吃音者が父親に望むサポートの 4 種類とし、質問紙は、「話し終わるまでゆっくりまつ」「吃音についてオープンに話をする」など同一内容の 20 項目で構成され、各項

目を「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の 1～5 の 5 段階で採点した。さらに、同意が得られた参加者に、「親の支援で役に立ったこと」、「親の支援で役に立たなかった、または迷惑だったこと」「親に望むサポート」について、インタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。面接は、対象者の了解を得て IC レコーダに録音し、逐語録をデータとした。

3. 分析方法

1) 質問紙調査

関連については、スピアマンの順位相関係数を用いた。また多群間の差の検定は一元配置分散分析を用い、サポートの比較については、対応のある t 検定を用いて分析した。有意確率は 5%とした。なお分析には統計ソフト IBM SPSS Statistics24 を使用した。

2) 面接

親に望むサポートについて内容分析を行い、抽出したカテゴリを HOUSE⁴⁾による 4 つのソーシャル・サポート、①情緒的サポート：慰め、励まし、②評価的サポート：当事者の態度や問題処理手段などへの評価、③道具的サポート：問題処理に関する具体的・実地的な援助、④情緒的サポート：問題処理に役立つ情報の提供、を参考に分類した。

III. 倫理的配慮

研究目的・方法、協力の任意性および撤回の自由、研究協力に伴う負担並びに予測されるリスク・利益、個人情報取り扱い、研究成果の公表について口頭及び文書で説明した。また、研究終了後、研究資料は施錠できる書庫に 5 年間保管後レコーダの内容は削除し、逐語録にしたデータおよび紙面の分析結果はシュレッターで破棄することを合わせて説明し、書面にて同意を得た。18 歳未満の参加者に対しては保護者の同意も書面で得た。

IV. 結果

1. 質問紙調査

1) 研究参加者

研究参加者は、28 人であり内訳は、男性 19 人 (67.9%)、女性 9 人 (32.1%) であった。年齢は、平均 21.8 歳 (男性 22.0 歳、女性 21.4 歳)、年齢区分は、10 歳代 9 人 (32.1%)、20 歳代 19 人 (67.9%) であった。

吃音の症状について、いつもある 12 人、時々ある 15 人、どちらとも言えない 1 人
吃音があることで日常生活で困っていることがあるかについては、いつもある 4 人、時々ある 20 人、どちらとも言えない 3 人、ほとんどない 1 人であった。

2) LSAS-J リーボヴィッツ社交不安尺度 (日本語版)

LSAS-J 調査票では、恐怖感/不安感の行為状況 14.04 点、社交状況 15.68 点、合計 29.71 点であり、回避の行為状況 9.54 点、社交状況 12.46 点、合計 22.00 点であった。LSAS 合

計点は 51.71 点であった。なお、行為状況の得点範囲は、0 点から 39 点、社交状況の得点範囲は 0 点から 33 点、合計の得点派には 0 点から 72 点である。

LSAS-J の因子の点数と、吃音の症状や吃音があることで日常生活で困っていることがあるとは相関関係はなかったが、日常生活上での恐怖感や不安感を比較的強く感じていると考えられる。しかし、恐怖感や不安感を感じているわりにあまり回避せずに行為を行っていることもわかる。

3) 親のサポートについて

母親の現在のサポートは、「話し方よりも、話の内容に注目する」1.30 点、「言おうとしていることを遮ったり、先取したりしない」1.56 点、「吃音に関するあなたの努力や心がけを評価してくれる」2.00 点、「話し終わるまでゆっくり待つ」2.04 点、「吃音に関するあなたの成果をねぎらってくれる」2.07 点の項目がサポートしてくれている項目であった。

「吃音の調子が悪い時には話しかけない」4.48 点、「「ゆっくり」「落ち着いて」などの言葉をかける」4.44 点、「友達の親に吃音のことを母親から伝える」4.37 点、「吃音の調子を聴く」4.37 点であり、そういうサポートをしていない項目であった。

父親の現在のサポートは、「話し方よりも、話の内容に注目する」1.44 点、「話し終わるまでゆっくり待つ」1.74 点、「言おうとしていることを遮ったり、先取りしたりしない」1.89 点がサポートしてくれている項目であった。「友達の親に吃音のことを父親から伝える」4.96 点、「学校・塾・アルバイト先・職場などに吃音のことを父親から伝える」4.81 点、「吃音の調子を聴く」4.78 点、「「ゆっくり」「落ち着いて」などの言葉をかける」4.63 点、「吃音がある人の会や親の会に参加する」4.56 点の項目はそういうサポートをしていない項目であった。

母親と父親の現在のサポートについて有意な差があった項目は、11 項目あった。「吃音のことを話題にする」母親 3.26 点、父親 4.37 点。「学校・塾・アルバイト先・職場などに吃音のことを伝える」母親 3.67 点、父親 4.81 点。「友達の親に吃音のことを伝える」母親 4.37 点、父親 4.96 点。「吃音がある人の会や親の会に参加する」母親 3.67 点、父親 4.56 点。「吃音関連の専門家のアドバイスを求める」母親 3.26 点、父親 4.30 点。「吃音についてオープンに話をする」母親 2.67 点、父親 3.67 点。吃音についての悩みやつらさ、グチを聴いてくれる」母親 2.33 点、父親 3.33 点。「吃音はマイナスではないと励ます」母親 2.63 点、父親 3.74 点。「吃音に関するあなたの成果をねぎらってくれる」母親 2.07 点、父親 2.81 点。「吃音に関するあなたの努力や心がけを評価してくれる」母親 2.00 点、父親 2.56 点。「吃音に関してあなたに必要な情報を与えてくれる」母親 3.22 点、父親 4.11 点。

期待することについては、現状の上位・下位と同じような項目が上がってきている。母親と父親に対する期待で有意差があった項目は 3 項目であり、母親、父親ともに同じような項目をサポートとして期待していると考えられる。差があった項目は、「吃音についてオープンに話をする」母親 2.22 点、父親 2.85 点。「吃音に関するあなたの努力や心がけを評価してくれる」母親 1.41 点、父親 1.63 点。「吃音に関してあなたに必要な情報を与えてく

れる」母親 2.33 点、父親 2.78 点。すべてにおいて母親より父親に対してよりサポートを期待する項目である。

現状のサポートと期待するサポートの比較では、母親では 9 項目、父親では 15 項目あり、父親のほうに対して、もっとサポートを期待していることが考えられた。

母親と父親の現在のサポートと期待するサポートにおいては、LSAS-J の因子の点数との間で有意な相関は数項目のみであった。吃音者が親から受けているサポートや期待するサポートと、社交不安との間に直接的な関連性はなかった。

2. 面接調査（インタビュー）

1) 研究参加者

研究参加者は、11 人（男性 6 人、女性 5 人）であり高校生 2 人、大学生 5 人、社会人 4 人であった。本報告においては、高校生と大学生以上では親のサポート状況にも違いがあると考え、19 歳から 29 歳までの大学生、社会人 9 人（男性 4 人、女性 5 人）を分析した結果を報告する。

2) 親に望むサポート

青年期の吃音者のほとんどは、「この年になったら自分で解決していくしかない」、「親に心配をかけたくない」「親に相談することが少なくなった」「親には話さないから親は治ったと思っている」と答えていた。その一方で、親に望むサポートは、5 つのカテゴリが形成された。①情緒的サポートは、【自分を飾らず本音が言える居場所】【成長に応じた課題があることを理解する】【精神論を押し付けない】の 3 つ、②評価的サポートは、【任せて見守る】の 1 つ、③道具的サポートは、【調子が悪いとき、本当に困っているときのさりげない手助け】の 1 つに分類された。問題処理に役立つ情報の提供である④情動的サポートの表出はなかった。

参加者の具体的な語りを以下に示す。

(1) 情緒的サポート

①【自分を飾らず本音が言える居場所である】

参加者は、「就活で落ち込んでいて、外では緊張してしゃべることや面接がうまくいかず落ち込んだ時に、家では親が普通に受け入れてくれて、自分を飾らずに居られる居場所があることで救われた。」「それまでの親との関係（吃音への理解、対応）も大きいけど、やっぱり吃音を気にせず、人目も気にせず話せる場所が母親かなと思う」などと語った。

②【成長に応じた課題があることを理解する】

参加者は、「小学校のときみたいに親に何でも相談する訳じゃないから、親は治ってるって思ってるみたいなんです。でも、就活とか、会社でのプレゼンとか、それこそこれから結婚の挨拶とか、成長して吃音が治るわけじゃないから、その時その時の問題？課題？が出てくるっていうのを、別に何してくれなくてもいいけどわかってほしいなと思う」、「それまでは、学校に伝える時親に伝えてもらう事もできたけど、

さすがに大学ではそうもいかない。たぶん親は吃音治ったくらいに思っているけど、大人になったからこそ乗り越えないといけないものも大きい。それを親にしてくれて言うんじゃないけど、成長したから吃音大丈夫っていうのとは違うことは知っておいてほしい」などと語った。

③【精神論を押し付けない】

参加者は、「精神的に場数を踏んで鍛えれば大丈夫…みたいな精神論は押し付けないでほしい」、「練習してみなよって、引っ越し業者への連絡の電話を何件もかけさせたけど、本音、無理、代わってほしい、場数踏んだからってできるもんじゃないと思いつながら電話した」などと語った。

(2) 評価的サポート、

①【任せて見守る】

参加者は、「たぶん、この年になってうまく話せないのを親も見るといやだとおもうんですよ。でも、任せて見守ってくれるのは有難い」、「親とは考え方も違ってくるじゃないですか。だから任せてもらって、吃音のことはちょっと気にかけてくれるくらいの付き合いがいいと思う」、「単に知らん顔する、気配りしながら見守るっていうか、気にかけてくれるのは安心感が全然違う」などと語った。

(3) 道具的サポート

①【調子が悪いとき、本当に困っているときのさりげない手助け】

参加者は、「もう大学生だからって自分では思うけど、本当に困っていることがあったとき、大丈夫と声かけてくれたり、電話をかけてくれたりするのには本当にありがたい」、「サポートしてやってる・・・ってありありじゃなくて、今日は調子悪そうだなって親が感じてくれて、それ（美容室の予約の電話）しとくよ…って言ってもらった時はほっとした」などと語った。

V. 考察

青年期の吃音者は、青年期の特徴（Havighurst, R. J.）である、『親からの情緒的独立の達成』『社会的に責任のある行動への努力』『経済的に実行しうるキャリアへの準備』などの課題に直面しながら生活を送っている。

今回、青年期の吃音者の SAD に関しては、LSAS の因子の点数と、親からの支援には直接的な相関関係は認められなかった。これは、今回の参加者が、青年期の中でも比較的年齢が高い参加者（19 歳から 29 歳）であり、親とのつきあい方も、「心配をかけたくない」、「この年になったら自分で解決していくしかない」、「親に相談することが少なくなった」と自立していく年代であったことも要因として考えられる。一方で、このように、自立・自律にむけた段階にいる青年期の吃音者ではあるが、親に対して【成長に応じた課題があることを理解する】、【精神論を押し付けない】といった吃音に対する正しい理解と対応を望んでおり、【自分を飾らず本音が言える居場所である】ことの期待も抱いていることが明らかとなった。また、【調子が悪いとき、本当に困っ

ているときのさりげない手助け】も必要と感じていた。

青年期は、親離れの時期でもあり、社会の中で自分で対処していることを身につけること、またその行動をとることを求められるが、本音が語れる居場所として親の存在も大切である。身近な相談相手として、自分のことを分かってくれる存在として、母親や父親を求めている部分もある。合わせて親以外の友人や職場の理解、ソーシャル・サポートの重要性が増してくると考えられるため、吃音者を取り巻く様々な環境におけるソーシャル・サポートについての研究に取り組んでいく必要があると考える。

引用・参考文献

- 1) 森浩一：小児発達性吃音の病態研究と介入の最近の進歩, 小児保健研究, 77 (1) , 2-9 頁, 2018
- 2) 菊池良和, 梅崎敏郎, 澤津橋基広ら：吃音症における社交不安障害の重症度 (LSAS-J) の検討：耳鼻と臨床 63 (2), 41-46 頁, 2017
- 3) Blumgart E et al: Social anxiety disorder in adults who stutter. *Depress Anxiety* 27:687-692. 2010
- 4) House, J. S. 1981 *Work stress social support and social support*. Reading, Mass. : Adison-Wesley.